

<雑録>福島県日尚鑛山概況

著者	竹内 常彦, 南部 松夫
雑誌名	東北大学選鑛製錬研究所彙報 = Bulletin of the Research Institute of Mineral Dressing and Metallurgy, Tohoku University
巻	8
号	2
ページ	268-268
発行年	1953-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/32148

福島縣日尙鑛山概況

竹内常彦, 南部松夫

日尙鑛山は萩原鑛業株式會社の所有に屬し、常磐線勿來驛の西方約17 km、福島、茨城兩縣境に近い石城郡田人村の西縁部に位置する。本鑛山地域は阿武隈高原の南部にあたり、東方太平洋側水系と西方久慈川水系の兩者を分つて南北に連る分水嶺をなす朝日山(797m)と和尚山(804m)の中間部を占める。鑛山に達するには勿來驛より田人村古田迄は自動車を通ずるが、こゝより山元迄の2.5 kmの間は徒歩によらねばならない。

本地域^{1, 2)}は所謂竹貫統が略南北に長く分布し(鑛山附近では東西幅約3 km)、東部及び西部は底盤状の花崗岩類の貫入によつて劃されている。本統は雲母片岩、石英片岩、侵入片麻岩を主とし、他に若干の綠色片岩、石灰岩等を夾んでいる。鑛床附近の雲母片岩は花崗閃綠岩の貫入を受けて、主として侵入片麻岩となり、走向傾斜は區々であるが、走向 N10~20°W 乃至 N20~30°E、東に60~80°に急傾斜するものが多い。

露頭は褐鐵鑛となり、南北(走向に略一致)に約1 km、東西200 mの間に點在するが、探鑛は漸く緒についたのみで全貌は明かでない。四時川上流支澤を挟んで、南北に若干鑛押した舊坑があり、この部分を1.5 m 堀下げした結果では走向略南北、東に50~60°の傾斜を有する幅約2.5 mのペグマタイト質岩脈中に黃銅鑛を含む硫化鑛が網脈状をなし、又は鑛染している(平均銅品位2.5%内外)。現在、舊坑口の西方35 mの地點より(水準差6 m)第1立入を堀進しているが約30 mの地點で、幅1 mの別脈に着脈し(平均銅品位1.0%)、あと10 mで舊坑口の堀下げした部分の下部の情況が判明する筈である。

ペグマタイトは斜長石—正長石—石英—1種の黑雲母—榍石脈である。斜長石³⁾は肉眼的に白色より青綠色の間で濃淡の差を示し、顯著なアルバイト式双晶をなし、正長石は多少カオリン化している。黑雲母は恐らく鐵雲母に屬し自形をなして主として硫化鑛と共生し、榍石は粒状又榍状をなして局所的に集中し或は脈状集合をなしている。

黃銅鑛、磁硫鐵鑛、黃鐵鑛の硫化鑛物は黑雲母を作つてペグマタイト構成鑛物間を充填し、或は網脈状に貫く。長石の結晶中には屢々磁硫鐵鑛、黃銅鑛が鑛染している。黃鐵鑛は粒状をなして磁硫鐵鑛、黃銅鑛中に包有されるが、大部分は硫化鑛物中の最末期品出物として、ペグマタイト鑛物や他の硫化鑛を交代している。ヒシゲル石⁴⁾($\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2 \cdot n\text{H}_2\text{O}$?)は單獨又は方解石、石英、黃鐵鑛と共に脈状をなして總ての鑛物特に早期黃鐵鑛を貫いている。

本鑛石形成順は大略斜長石、正長石、石英→榍石、黑雲母→磁硫鐵鑛→黑雲母、黃銅鑛→黃鐵鑛→方解石、石英、ヒシゲル石の順である。⁵⁾即ち斜長石、正長石、石英を主とするペグマタイト脈形成に引續いた鑛化作用によるもので、鑛化作用は微弱ながら熱水期まで引續いたことが考えられ、他に類例も少なく、鑛床學的にも興味が深い。従つて本鑛床の開発にあたつては特に綿密なる調査と探鑛とが望まれる。最後に本鑛床見學の機會を與えられた萩原鑛業株式會社取締役柏原茂一及び佐々木清五郎の兩氏に深謝する。

1) 渡邊久吉, 佐藤源郎: 7萬5千分1勿來圖幅(1928), 同説明書(1933)。

2) 星野義昭: 東北大理學部岩鑛教室卒論(1952)。

3) この長石は今後くわしく調べる豫定である。

4) 竹内常彦, 南部松夫: 選研彙, 8(1952), 7—14。

5) 磁硫鐵鑛、黃銅鑛に伴つて、それらよりやゝ早期に品出したと思われる少量の柘榴石、綠簾石を含むことがある。